

薬剤部 DI ニュース

【小児の薬の飲ませ方】について

Q 1. 小児（乳幼児期）の薬の飲ませ方を教えてください。

A1. 小児の場合、決まった方法でどの子も薬をうまく飲むことができるというものではなく、たくさんのバリエーションを用意して、その中からその子に合った方法を選択するという意識をもって対応する必要があります。もう一つは保護者と一緒に「飲ませる必要性」と「飲ませやすい方法」の双方について考え、わかりやすく説明することが、小児の服薬アドヒアランス向上には重要です。以下に一般的な飲ませ方について紹介します。

●水剤・シロップ剤の飲ませ方

①薬の容器を振り中身を均一に混ぜます。

②1 回分の量を添付のカップやスポイトで量り、何回かに分け少量ずつ、すべて飲ませます。

✓スポイトを使う場合

口の中央でなく、口の端側から入れて、舌に当てないように頬の内側から奥の方に、ゆっくり流し込みます。

✓スプーンを使う場合

薬を吐き出してしまうことがあるので、1 回分を少量にして数回に分けて飲ませます。

✓哺乳瓶の乳首を使う場合

補充瓶を使用する乳児の場合、空の乳首に薬を入れて吸わせます。

先に乳首だけをくわえさせ、吸い始めたら薬を入れるとこぼさずに飲ませることができます。

③薬を飲んだ後は水や白湯（さゆ）などを飲ませます。

《注意すること》

- ・薬の入った容器を激しく振ると泡立ち、正確な計量ができなくなるため軽く振り混ぜるようにします。
- ・誤嚥防止や薬をこぼさないように、横抱きもしくは上体を起こして飲ませます。

●粉薬（散、細粒、顆粒、ドライシロップなど）の飲ませ方（主に新生児～幼児）

①**✓水や白湯（さゆ）に溶かす場合**（「水剤・シロップ剤の飲ませ方」も参照）

1 回分の薬を飲みきれる量の水（小さじ 2 分の 1 杯（2.5cc）程度）に溶かし、哺乳瓶の乳首やスポイト、スプーンを使ってなるべく口の奥の方に流し込むようにします。

✓団子状にする場合

1 回分の薬を小皿やスプーンなどに出して、1 滴ずつ水を垂らし、垂らしては混ぜることを繰り返し、団子状や泥状に練って、清潔な指で、苦味を強く感じにくい頬の内側や上顎に塗り付けます。

②口の中に薬が残ると苦味が出ることもあるため、薬を飲ませた後で水や白湯などを流し込むように飲ませます。

《注意すること》

- ・時間がたつと薬の味が変わったり、効果が弱くなることがあるので、飲む直前に溶かし、溶かしたらすぐに飲ませます。
- ・舌の上に薬がのると、味を感じてしまうので、直接舌の上にはのせないように気を付けます。
- ・飲食物に混ぜる場合は食べきれる量、薬によっては混ぜてはいけないものがあるので注意が必要です。また、薬をミルクやご飯に混ぜると、味が変わり、ミルク嫌いや食事嫌いの原因になるため避けます。

Q2. そのまま薬が飲めない場合、どのような工夫がありますか？

A2. 新生児や乳児期には薬を口に入れること自体が難しいことがあります。このような時に使用しやすく、薬用量を測るにも便利とされているのは、服薬補助器具（注入器・スポイト）です。

また、薬の苦みや舌触りなどを嫌がる場合には、以下の表1にあるような飲食物や服薬補助ゼリーなどが用いられます。

表1. 飲食物などを使った服薬の工夫

| 食品例 | 特徴 |
|--------------------------------|---|
| アイスクリーム | 味が濃く、味をマスクしやすいとともに、冷たいので味覚を麻痺させる。 |
| コンデンスミルク（練乳）、砂糖、単シロップ、水あめ、ハチミツ | 甘味が強く粘りがあるので、薬の食感や味をマスクしやすい。 ただし、ハチミツは1歳未満の乳児には乳児ボツリヌス症の危険があるため避ける。 |
| チョコレートスプレッド、ココア | 味が濃く、特に苦みの強い薬をマスクしやすい。 |
| バナナ | 香りも強く味やにおいをマスクしやすい。ペースト状にして薬を挟み込むようにするとよい。 |
| プリン | 甘味が強く、カラメルの苦味により苦みのある薬をマスクすることもできる。 |
| 味噌汁、ポタージュ、のりの佃煮 | 甘味を嫌がる場合に適している。 |
| ヨーグルト | 混ぜると苦みが出たり、薬効が低下するものもあるので注意が必要。 |
| 市販の服薬補助ゼリー | ゼリーと薬を混ぜるのではなく、ゼリーで薬を包み込み、苦みやにおいをマスクし、飲みやすくすることができる。製品によりpHに違いがあり、特にマクロライド系抗生剤ではpHが中性のものを選択する。 |
| カプセル、オブラート | 粉薬は苦手でもカプセルなら飲めるという場合は、カプセルやオブラートに粉薬を入れて服用させる。オブラートは口腔内に付着して飲みにくかったりするため、服用時に、外側を水に浸し、とろみをつける。袋状やフルーツ味のオブラートも市販されている。 |

《飲ませる際に配慮すること》

- 薬は決しておいしい食べ物ではなく、治療のために必要なものということを伝える。
「美味しいから飲もうね」という言い方は避け、「病気を治すために必要なもの」として飲ませる。
苦い薬を甘いとウソをついてしまうと信頼関係に関わるので気を付ける。
- 無理やり飲ませるといふ必死さが顔に出ないように気を付ける。
「病気を治そうね」「元気になろうね」と声掛けも効果的な場合が多い。
- やむを得ず強制的に飲ませる場合も本人の自尊心を傷つけないように配慮し、安全で確実な方法を試みるよう努力する。
- 飲めた時は十分に褒め、自信を持たせる。飲めなかった時はあまり叱らず、飲んでくれなくて残念ということ伝える。

参考：翔薬 TOPIC No.170

薬剤部 田中